

主な内容

- 特集——総合診療医学分野／総合診療科について
トピックス——オープンキャンパス2018が開催されました
看護部キッズ参観日が行われました
フリーページ——すこやかスポット薬学講座No.11
「がん分子標的治療薬に対する耐性との戦い」

表紙写真：看護部キッズ参観日（2018.7.31 撮影、関連記事P5）





総合診療医学分野／総合診療科について

救急・災害・総合医学講座 総合診療医学分野 教授 下沖 収

1. 総合診療の目指すもの

わが国では臓器別専門医による高度専門医療が目覚ましい成果を上げてきました。その一方で超高齢社会を迎え、医療ニーズの変化、社会保障費の増大、医療資源の地域偏在などが大きな問題になっております。複数の慢性的医療問題を抱える患者さんが増加し、地域包括ケアが求められる中、幅広く対応できる医師が求められています。総合診療は、臓器・疾患にとらわれずに全人的・包括的診療ができる基本能力と家族や地域社会をも診る視点を備え、さまざまな医療現場でしなやかに対応することを目指します。

2. 医学部救急・災害・総合医学講座 総合診療医学分野について

2017年4月に開設され、歩み始めたばかりの教室です。当教室のミッションは「総合診療マインド」と「リサーチマインド」を兼ね備えた良医の養成を通じて、地域医療の充実に貢献することです。

1 診療

2017年は受診科の振分け、2018年4月から外来診療を開始しました。原因不明の発熱、倦怠感、体重減少など、専門診療科を特定できない患者さんが受診されております。詳細な問診と身体診察から問題点を整理し、かかりつけ医と専門診療科と連携しながら問題解決を図っております。現在のところ紹介率は33%と少ない状況ですので、さらなる広報活動を行ってまいります。

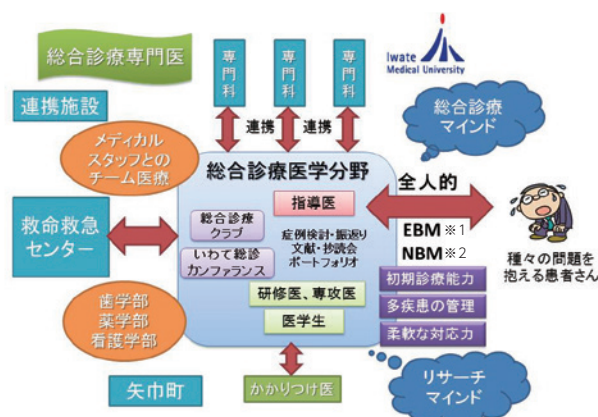
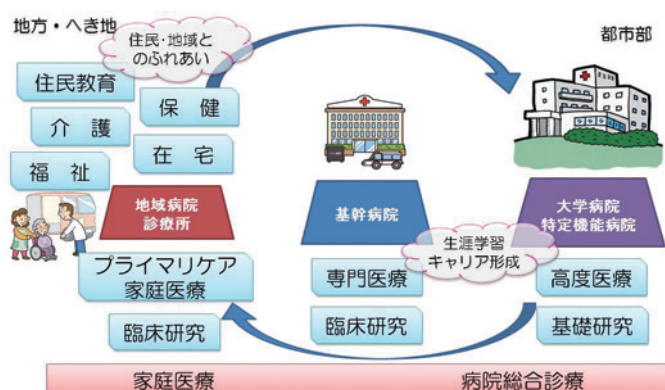


左から：山田助教、星川助教、下沖教授、高橋特任講師、菊地助教

〈外来担当医表〉

担当医	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	第1土曜日	第4土曜日
午前	初診 1st 高橋 智弘	山田 哲也	菊地 大輝	星川 浩一	下沖 収	菊地 大輝	山田 哲也
	初診 2nd / 再来 菊地 大輝	高橋 智弘	星川 浩一	山田 哲也	山田 哲也	高橋 智弘	星川 浩一
午後	初診 / 再来 菊地 大輝	山田 哲也	菊地 大輝	星川 浩一	山田 哲也		

※午後の診療は2018年10月から開始予定です（現在は診療科の振分けを行っています）。



※1 EBM : Evidence-based Medicine 根拠に基づいた医療
 ※2 NBM : Narrative-based Medicine 患者さんの物語に基づいた医療

2 教育活動

医学部3年生の「症例基盤型学修（発展）」で、患者さんへの全人的な関わり、4年生の「実践臨床医学」では、臨床医に必須の医療安全や研究手法などの学修を担当しております。

また医・歯・薬・看護学部横断的自由科目である「地域医療課題解決演習」では、多職種連携と地域医療学修へのモチベーション向上を目指しております。

課外学習としては、「総合診療クラブ」、学外施設と共催しての「いわて総合診療カンファランス」などを行い、総合診療の裾野を広げる活動を行っております。開催日などはホームページに掲載しておりますので是非ご覧ください (<https://sougousinryou.jp/>)。

	目 的	対 象	方 法	参加人数
総合診療クラブ	症候からの臨床推論や地域医療に関する学修	医学生、研修医、若手医師等	月1回の集合学修、ワークショップ等	開催実績：11回 参加者：のべ147人 (2018年7月現在)
いわて総合診療カンファランス	岩手県における総合診療の裾野を広げる	県内の研修医、医師、コメディカルスタッフ等	隔月で担当病院から配信するテレビカンファランス	開催実績：3回 参加者：のべ163人 学内45人、学外118人 (2018年7月現在)



総合診療クラブの様子



いわて総合診療カンファランスの様子

3 専門医研修プログラム

2018年度開始の新たな専門医制度の中で、総合診療は19番目の領域に位置づけられました。岩手医大総合診療プログラムでは6名の専攻医を募集しております。特徴は大学附属病院の利点を最大限に生かしながら、沿岸被災地や医師不足地域等の25施設と広く連携していることです。連携施設では都市部や大病院にはない学びの場として、「総合診療マインド」の涵養を目指します。

4 研究活動

プライマリケア、高齢者医療、予防・健康増進等を主要テーマに研究を進めることを目指します。現在、矢巾町と特定保健指導に加える介入方法や塩分摂取量を減らすための試みについて共同研究の準備を進めております。また、医療資源の偏在や地域医療教育についても研究課題として取り組んでまいりたいと考えております。

3. 今後の展望

附属病院移転後は、内丸メディカルセンター（仮称）での外来診療充実と、入院診療も開始する予定です。学生の臨床実習、臨床研修医を受入れ、臓器別専門医を目指す上でも必要な基本的診療能力に加え、全人的存在として患者さんに関わる態度を修得する研修を提供してまいります。

矢巾新病院敷地内に開業予定のホテルの起工式が行われました

7月2日（月）、矢巾新病院敷地内において、ホテルの起工式が行われました。

工期は来年7月までの約1年間です。客室は300室で、営業開始は来年8月頃を予定しています。



■ 施設概要

〈延床面積〉 7,513㎡
 〈構 造〉 鉄骨造、地下1階、地上10階建
 〈客 室 数〉 300室 〈収容人数〉 459人
 〈運営業者〉 ルートインジャパン株式会社

リーママ トーキングカフェが行われました

7月13日（金）、木の花会館3階会議室において、看護部のリーママ*応援企画として「リーママ トーキングカフェ」が開催され、育児休業中の看護師8名が参加しました。

この催しは、「仕事と子育てを両立できるか」「夜勤のときはどうすればいいか」など、育児休業を終え職場に復帰する際に抱える様々な不安を軽減し、ワークライフバランスの充実につなげることを目的として行われました。

当日は、看護部から夜勤免除や短時間勤務制度などの情報提供のほか、先輩リーママからの経験談の紹介が行われ、参加したリーママは真剣に耳を傾け、普段の生活の流れや効率良く家事と育児をする上での工夫すべき点、保育園の手続きなどについて質問の声が上がりました。

*リーママ：育児をしながら働く女性



平成30年度岩手DMAT隊員養成研修が行われました

7月5日（木）から6日（金）にかけて、矢巾キャンパス災害時地域医療支援教育センターにおいて、岩手DMAT隊員養成研修が行われました。

本研修は、災害急性期（発災後48時間以内）における被災地内での医療の確保を図るため、救出・救助部門と連携して可及的速やかに活動できる機動性を持った災害派遣医療チーム（DMAT：Disaster Medical Assistance Team）の養成を目的とした研修です。今回は、県内の病院から医師・看護師の他、業務調整員として薬剤師・理学療法士・事務員など、総勢22名が参加し、本学から5名が受講しました。



研修初日は、医師、看護師、業務調整員の職種別に講義が行われ、それぞれの専門性に応じた役割を学びました。二日目は、実際の災害を想定した救護所運営訓練が行われ、本部と現場救護所の情報共有や他病院のDMATチームとの連携方法などを確認しました。参加者は局地災害において、傷病者に対する救命処置などの活動が的確に行えるよう知識・技能の修得に励みました。



オープンキャンパス2018が開催されました

7月28日（土）・29日（日）の両日、矢巾キャンパスでオープンキャンパス2018が開催され、岩手県内をはじめ全国各地から高校生とその保護者など約1,100名が参加しました。

当日は、入学を希望する学部に分かれてのミニ講義や体験実習のほか、在学生とのフリートーク、教員による進学相談、ドクターヘリ基地の見学、学食の無料体験など盛りだくさんの企画が用意され好評を博しました。

参加した学生らは、大学生活に夢や希望を膨らませていた様子で、将来の進路を決めるための有意義な機会となったようです。



体に優しい内視鏡体験



在学生とのフリートーク



ドクターヘリ基地の見学

看護部キッズ参観日が行われました

7月31日（火）、木の花会館3階会議室及び本学附属病院において、看護職員の子どもを対象としたキッズ参観日が初めて開催され、夏休み中の小学生11名が参加しました。

この催しは、子どもたちが看護職として働く親の姿を見学し、看護の仕事に関心を持つことで、子育て中の看護職員の意欲向上や仕事に対する家族の理解を深めることを目的として行われました。

当日は、子どもたちも実際のユニフォームを着用し、親の働いている病棟において血圧・体温測定、患者さんの搬送、足浴、点滴投与などを見学しました。その後、木の花会館に戻り、人形を使用した聴診や心肺蘇生法を体験しました。

参加した子どもたちからは、「看護師の仕事のやりがいと大変さがよく分かった」、「家に帰ったら家事をお手伝いしたい」など、感謝の気持ちが伝えられました。



本学創立120周年を広報した新聞広告が第49回岩手広告賞を受賞しました



平成29年4月20日付掲載 岩手日報朝刊 11面

本学が創立120周年を迎えるにあたり、創立からこれまでの歴史や創立120周年記念事業について広く発信するため、平成29年4月20日付の岩手日報に掲載した新聞広告が第49回岩手広告賞（最高賞）を受賞しました。

岩手広告賞とは、岩手広告協会が県内の優れた広告をたたえ、広告文化の向上と県内経済の活性化を図るために毎年行われているもので、新聞広告の部、テレビ広告の部、ラジオ広告の部、ポスター広告の部、グラフィック広告の部、屋外広告の部、連合広告の部の7つの部門があります。今回の表彰は平成29年1月1日から12月31日に県内で使用された広告を対象とし、すべてで98点の応募がありました。

7月24日（火）、盛岡グランドホテルにおいて表彰式が行われ、岩手広告協会の東根千万億会長から賞状碑と副賞として秀衡塗の漆器が贈呈されました。

表彰にあたり、杉本吉武審査委員長は、「レイアウトも良く、県民になじみのある病院の歴史を知る内容で意義がある。」と述べ、古川雅之特別審査員からは、「デジタル時代の中の新聞広告らしい内容。情報量が多く、見るだけで内容が濃そうと思わせる。」との講評をいただきました。



賞状碑



同12面



同13面



同14面

第41回 盛岡さんさ踊りにおいて本学職員チームがパフォーマンス賞を受賞しました

世界一の太鼓パレードと称される「第41回 盛岡さんさ踊り」が8月1日（水）から4日間にわたり開催され、本学職員チームは初日のパレードに参加し、衣装・小道具類・一八・仮装等、アイデアの優れている団体を表彰するパフォーマンス賞を受賞しました。

パレードでは、小川理事長を筆頭に約200名の職員・医療専門学生が、中央通りの約1キロの区間を練り歩きながら、盛岡さんさ踊り第3番の「栄夜差踊り（えいやさおどり）」を披露し、沿道に詰め掛けた観客の歓声に応えました。

また、同日、本学学生によるさんさ踊り部もパレードに参加し、華麗で力強い演舞を披露しました。



職員によるパレード

看護学部1年の小川千奈さんは「2018ミスさんさ踊り」としてパレードに参加しました



□小川千奈さんから
学業と練習の両立は大変でしたが、先生方や先輩、友人の支えにより無事パレードを終えることができました。皆様への感謝の気持ちを忘れず、岩手の観光大使としてさんさ踊りの魅力を多くの人に知っていただけるよう頑張ります。



賞状



さんさ踊り部によるパレード

岩手医科大学募金状況報告

【創立120周年記念事業募金】

岩手医科大学創立120周年記念事業募金に対し、特段のご理解とご支援を賜りました皆様方お一人おひとりに、厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

今後とも格別なるご支援・ご協力を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

今回は第23回目の御芳名紹介です。（平成30年5月1日～平成30年6月30日）

※御芳名及び寄付金額は、広報を希望されない方は掲載しておりません。

●法人・団体等（5件）

<30,000,000>

株式会社 こすかたサービス（岩手県盛岡市）

<100,000>

医療法人 藤田眼科医院（埼玉県川口市）

<御芳名のみ掲載>

富士産業 株式会社（東京都港区）

株式会社 エスアールエル（東京都新宿区）

株式会社 イトーキ盛岡支店（岩手県盛岡市）

●個人（13件）

<1,000,000>

藤巻 英二（医29）

相馬 剛（専15）

<300,000>

藤井 謙（医27）

堀内 健二郎（専17）

<20,000>

竹内 守（医18）

<御芳名のみ掲載>

寺田 明功（父母）

日下 純男（医14）

内海 正人（父母）

安原 恵美（元教職員）

武本 真治（教職員）

佐々木 正義（父母）

松尾 泰佑（教職員）

荻野 義信（医48）

区 分	申込件数	寄付金額（円）
圭 陵 会	726	494,255,089
在 学 生 ご 父 母	554	290,180,000
役 員 ・ 名 譽 教 授	74	96,020,000
教 職 員	182	25,862,000
一 般	80	29,540,000
法 人 ・ 団 体	261	812,993,000
合 計	1,877	1,748,850,089

（平成30年6月30日現在）

平成30年7月豪雨(西日本豪雨)災害における 岩手医大 DMAT ロジスティックチーム活動

救急・災害・総合医学講座 災害医学分野 藤原 弘之

期 間／平成30年7月10日(火)～15日(日)

場 所／岡山県庁、岡山県倉敷市保健所

隊 員／【医 師】眞瀬 智彦(救急・災害・総合医学講座 災害医学分野 教授)

【業務調整員】藤原 弘之(救急・災害・総合医学講座 災害医学分野 助教)、

奥野 史寛(学務部矢巾キャンパス教務課 事務員)

活動概要

7月上旬大雨特別警報が計11府県に発表され河川の氾濫などにより広範囲が被害を受けた。特に広島県、岡山県、愛媛県などで甚大であった。それに伴い発災直後に西日本の一部のDMATに対して派遣要請が発出され、数日後DMATロジスティックチームについて当県を含む複数の都道府県に派遣要請が発出された。それを受け本学では救急・災害・総合医学講座災害医学分野の眞瀬教授をはじめとする3名(医師1名、調整員2名)の派遣を決定した。派遣期間は7月10日～15日の6日間(移動含む)、活動場所は岡山県となった。

岡山県では浸水被害や土砂災害が相次いで発生した。中心被災地は倉敷市真備町で、7月7日までに河川堤防が決壊し広範囲が冠水、50名以上の死亡が確認された。そのような状況下で岩手医大チームも含めたDMATロジスティックチームに課せられた任務は、中心被災地である県南西部保健医療圏の支援および県庁支援の大きく2点であった。岩手医大チームは県南西部保健医療圏の拠点である倉敷市保健所に調整員1名を派遣し、医師1名と調整員1名は県庁での活動となった。県南西部保健医療圏の拠点として倉敷市保健所に倉敷地域保健復興連絡会議(通称KuraDRO(クラドロ): Kurashiki Disaster Recovery Organization)が設置されたばかりで、本学調整員を含むDMATロジスティックチームメンバーはKuraDROの事務局機能を担い現地保健所の支援に尽力することになった。県庁メンバーはその上位本部としてKuraDROと密な連携をとりながら対応した。具体的な活動としては「県南西部保健医療圏内に2つある保健所のさらなる連携強化」・「真備地区の情報収集」・「避難所の症候群把握」・「保健師活動のサポート」・「KuraDROの本部機能強化」・「各種支援チームの派遣調整」などであった。

我々が活動した時期は急性期から亜急性期への移行期で非常に難しい時期であったが、2年前に当県岩泉町が被災した豪雨災害対応など過去の経験を生かし、現地保健所およびコーディネーターの支援を実施した。

最後に、現地ではいまだに災害対応が継続中であり災害関連死も含めた2次被害が拡大しないことを祈念するとともに、お亡くなりになられた方々へ哀悼の意を表します。



KuraDROにて本部員会議



岡山県庁での本部活動



県庁でのミーティング

「竹富島離島研修にて」

医師卒後臨床研修センター 臨床研修医 寺内 貴廣

竹富町立竹富診療所長である石橋興介先生は岩手医科大学出身（現在、救急・災害・総合医学講座 総合診療医学分野 非常勤講師）で、現在、岩手から遠く離れた沖縄県の竹富島で離島医療と島民健康づくりに関する取組みに尽力されています。その功績が讃えられ、竹富診療所は2017年に行われた「健康寿命をのぼそう！アワード」で厚生労働大臣最優秀賞を受賞されました。2018年2月に母校である岩手医科大学で開催された講演を聞き、岩手の医療にも活かせることがあるのではないかと思います、6月に現地に赴き研修させていただきました。



左から：佐野 史典 看護師、筆者、石橋 興介 診療所長

竹富診療所では主に島民の診療を行っています、竹富島は観光業が盛んであり、観光客にも診療を行うことがあります。実際に海で海洋生物のカツオノエボシ（クラゲの1種）に刺された方の診療を手伝わせていただくなど、今まで経験したことがない症例を数多く経験することができました。人口300人の島の診療所には高度な医療設備はなく、石垣島までの救急搬送は、主に島の自営消防団が担っています。筆者は滞在中、実際に搬送に使用する船にも乗せていただきました。

島民の健康に関しては、健康長寿の県として知られる沖縄県ですが、近年の加速的な食生活の欧米化により、65歳未満の死亡率が全国ワースト1位になるなど、多くの深刻な健康問題を抱えています。なかでも竹富島のある沖縄県八重山は、脳出血死全国ワースト1位となり、「沖縄クライシス」「八重山クライシス」と問題視されるようになりました。

そこで石橋先生は、島の人々の生活習慣に注目し、予防医療の推進に取組みました。具体的には「心と頭健康づくり」7項目（医療講話など）と「体を動かす健康づくり」6項目（歩け歩け運動など）の推進です。石橋先生によると、各活動の責任者を行政や診療所スタッフではなく島民が務めることで、主体性が生まれ、島民の意識が変わったといいます。実際に運動習慣や食生活の改善がみられ、脳卒中・心血管イベントは減少しているとのことでした。筆者自身も研修中に医療講話をさせていただき、生活習慣病予防の活動を石橋先生と一緒に行いました。

竹富島のような医療過疎地では、地域で提供できる医療には限りがあり、予防医療が重要となっています。成功モデルをそのまま模倣するのではなく、その地域を実際に訪れて、住民の声を聴くことが大切だと感じました。地域の特徴や疫学をしっかり把握した上で地域医療に従事し、予防医療を提供していくことの大切さを実感しました。

竹富島のような医療過疎地では、地域で提供できる医療には限りがあり、予防医療が重要となっています。成功モデルをそのまま模倣するのではなく、その地域を実際に訪れて、住民の声を聴くことが大切だと感じました。地域の特徴や疫学をしっかり把握した上で地域医療に従事し、予防医療を提供していくことの大切さを実感しました。



島の皆さんに医療講話中



地元の小学校新聞のインタビューを受ける筆者



外科学講座 早野 恵 専攻医が第43回日本外科系連合学会学術集会において、優秀演題賞を受賞しました

この度、2018年6月21日から23日に東京で開催された第43回日本外科系連合学会学術集会において「優秀演題賞」を受賞しました。今回発表した演題は「遊走脾に伴う胃軸捻転に対し腹腔鏡下脾固定・胃固定術を施行した1 幼児例」です。遊走脾は比較的稀な先天性の脾臓の位置異常のため若年発症が多く、近年は整容性の面からも腹腔鏡下でのretroperitoneal pouch法による脾固定術が報告されています。発表では、当院で経験した症例の手術ビデオを提示し、近年の腹腔鏡手術の報告例をまとめました。今回の学会では若手医師の発表も多く、同年代の方たちの発表を聞くことで大変刺激を受けました。今回の受賞を機に、今後も臨床・研究ともに力をいれていきたいと思えます。

最後に、受賞にあたり御指導、御協力頂いた皆様方に深謝申し上げます。

(文責：早野 恵)



左から：竹田 省 会長、早野 恵 専攻医

理事会報告 (6月定例－6月25日開催)

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 平成31年度学納金等について | 3. 店舗棟新築工事に係る工事費について |
| 2. 附属病院移転に係る引越業者の選定について | |

大学報原稿募集

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活潑な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、サークル紹介、学報への感想など、幅広くお受けします(表紙写真も募集しています)。

また、特集してほしいテーマや、各コーナー(「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など)への掲載依頼などもお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先

大学報事務局(企画部企画調整課)
内線 7022、7023
kikaku@j.iwate-med.ac.jp

シリーズ 職場めぐり

No.126

教養教育センター 外国語学科英語分野

外国語学科英語分野には、ジェイムズ・ホップス教授、柳谷千枝子助教、大沼仁美助教、ジョナサン・レヴィン小倉助教の4名が所属しています。10名の非常勤講師にもご協力いただき、全学部1学年の基礎英語科目や選択必修科目、さらに上級学年や大学院の専門英語科目を複数担当しています。各授業を通じて、実践演習と知識の習得に重点を置き、英語を効果的に運用できる医療人の養成を目指しています。

研究では、日本医学英語教育学会（JASMEE）および全国語学教育学会（JALT）で大いに活躍する他、医療倫理教育や文学研究、音声学、音韻論の研究など、各自の課題に取り組みながらその成果を論文や国内外の学会で発表しています。

教育や研究の他にも、本学研究者が執筆した論文の校閲および英語の口頭発表に関するアドバイス・指導を行うこと

もあり、学生だけではなく、本学教職員の英語能力の向上もサポートしています。

（教授 ジェイムズ・ホップス）



看護部（中8階）

中8階病棟は糖尿病・代謝・内分泌内科、腎・高血圧内科、救急科（循環器内科）、放射線科、睡眠医療科を主とした混合病棟です。各診療科の他に感染症検査室や共通ベッドがあり、内科的検査治療や糖尿病教育入院の他に、手術や化学療法を行う患者さんなど、20以上の診療科に幅広く対応しています。

心不全や腎臓疾患、糖尿病など生活習慣と関連する疾患が多いことから、その人らしい生活が送れるよう考慮しながら、日常生活を振り返り、行動変容への援助を行っています。また、安心して検査や治療が受けられるよう、医師・他部門とのカンファレンスを定期的開催し、情報共有を行いチーム一丸となり患者さんの心身のサポートに努めています。混合病棟で入退院が多く、急患・治療・検査が重なり多忙ではありますが、笑顔で心がけ、

チームワークのよさで対応し、『患者さん・ご家族の思いに寄り添い、優しく丁寧な看護の提供』を心掛けています。

（看護師長 中村 恵美子）



《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	佐藤真結美
影山 雄太	菊池 初子
松政 正俊	工藤 正樹
齋野 朝幸	熊谷 佑子
藤本 康之	安保 淳一
白石 博久	佐々木忠司
成田 欣弥	畠山 正充
遊田由希子	藤村 尚子
佐藤 仁	武藤千恵子
小坂 未来	高橋 慶
藤澤 美穂	

編集後記

今回の特集は「総合診療医学分野/総合診療科について」です。

社会的に高度専門医療化が進む中、全人的・包括的な診療もより重要になっていくことと思います。

私は同科のホームページ立ち上げの際にスタッフ写真の撮影等で協力させて頂いたのですが、下沖教授をはじめ、どの先生もとても気さくで印象がよかったのを覚えています。

このことから下沖教授の目指す「さまざまな医療現場でしなやかに対応する」が少し分かった気がします。

（編集委員 畠山 正充）

岩手医科大学報 第503号

発行年月日 平成30年8月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111（内線7023）

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット薬学講座

臨床薬学講座情報薬科学分野 教授 西谷 直之



がん分子標的治療薬に対する耐性との戦い

がんは、早期に発見できれば完治も望めますが、病状が進むと抗がん剤による薬物治療の効果には限界があります。進行がんの薬物療法を困難にしている原因の一つが、効いていた薬が効かなくなる耐性化です。我々は、抗がん剤耐性を克服するために、下記の2つのアプローチで取り組んでいます。

アプローチ1：耐性がん治療薬の開発

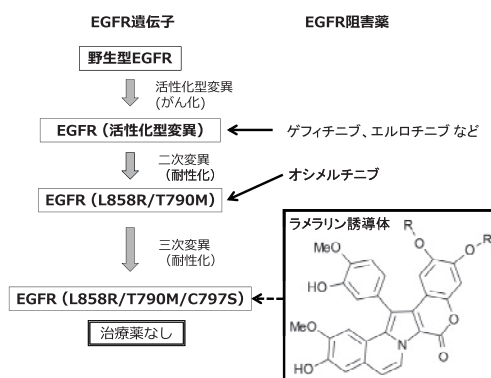
新しいタイプの抗がん剤として、分子標的薬に分類される医薬品が続々と開発されています。分子標的薬は、がん細胞が依存する分子を狙い撃ちするため、がんに特異的に作用すると考えられています。一部の肺がん（EGFR遺伝子に変異のある非小細胞肺がん）に用いられるEGFR阻害薬ゲフィチニブやエルロチニブは、劇的な治療効果を示します。しかし、治療開始1年程度で耐性が生じ、再発することが知られています。この再発肺がんの50%には耐性変異（EGFR T790M）が見つかりますが、2016年に販売開始されたオシメルチニブを用いることで対処できます。しかし、オシメルチニブに対する耐性（EGFR T790M/C797Sなど）も報告されており、今のところ、EGFR T790M/C797S変異に有効な医薬品は販売されていません。我々は、オシメルチニブ耐性肺がんに有効な新規医薬品シードとしてラメラリン誘導体を創出し、今年3月に国際特許出願いたしました。

アプローチ2：併用療法のための治療標的の探索

耐性との戦いは、がんだけではなく、感染症の領域でも繰り広げられています。HIVは耐性化しやすいウイルスですが、作用点の異なる複数の薬剤を併用することで耐性化を抑制することができます。一方、がん分子標的薬では、ほとんどのケースで耐性化します。その原因の一つは、治療選択が限られ、論理的に併用効果が期待できる薬剤が不足していることです。我々は、モデル生物であるゼブラフィッシュの受精卵を利用して、新たな治療標的を開拓する方法を開発しました。この方法で同定された治療標的は薬剤に結合する性質があるため、併用分子標的治療に応用できると期待しています。

分子標的薬の特徴として、古典的な抗がん剤に比較して正常細胞への毒性が低い事が挙げられます。分子標的薬への耐性を克服し、患者さんがその人らしく生活できる期間を延長することに貢献したいと考えております。

EGFR 遺伝子変異と治療薬



ゼブラフィッシュ胚を用いた治療標的の探索

